

陳國燦 劉永增 編

日本寧樂美術館藏吐魯番文書

文物出版社

ISBN 7-5010-0946-5
CIP 1997.5.1

日本寧樂美術館藏吐魯番文書

編者 陳國燦 劉永增

出版發行者 文物出版社

印刷者 北京五四大街二九號
向陽膠印廠

經銷者 新華書店

一九九七年十月第一版

一九九七年十月第一次印刷

定價：玖拾捌圓

787×1092 1/16 印張：9 插頁 1
ISBN 7-5010-0946-5/K · 409



奈良寧樂美術館

唐開元二年閏二月十八日蒲昌府索才牒

前奉
於署內止件人者其素目上件於
所注以爲法中州要小注以
開元二年閏二月
付日既是要
守拉婢其大急注
文配小
十八日
連小
十八日

前言

在「日本寧樂美術館藏吐魯番文書」一書出版之際，我謹向陳國燦、劉永增兩位先生，以及為本書的研究發表給予多方協助的諸位先生致以由衷的感謝和敬意。

據推測，這批文書可能是寧樂美術館的創立者中村準策（一八七六—一九五三年）先生於一九三九年至一九四〇年間偶然收集到的。

下面將寧樂美術館收藏品的內容大致介紹如下：

寧樂美術館收藏的中國文物主要包括中國古代的青銅器，以漢代為主的古銅印，漢至唐的古鏡，記有著名書法家真蹟的宋、明拓本類以及諸多觀賞陶瓷等。除此之外，還有朝鮮半島高麗時代至李朝前期的諸多陶瓷，日本茶道用陶瓷器皿、書畫等。

為了展示這些文物，在日本古都奈良建造了美術館（一九四〇年），其時該館的創立者就希望能通過這些日本美術的源流，即中國、朝鮮的古美術工藝品的展覽介紹，並通過涉訪奈良的人們，加深對鄰國的理解。

我最初接觸到「敦煌」二字是在一九五四年。當時在收藏品中發現有敦煌寫經二卷。可是，隨着藤枝晃先生對「德化李氏凡將閣珍藏」印等研究的進展，這兩件寫經被判定為贗品。

另一方面，藤枝先生在其研究的範圍內，對古文書類收藏品進行了調查，很早就指出，在為數不多的吐

魯番文書中，「日本寧樂美術館藏吐魯番文書」亦屬珍貴的資料。

因此，我將這些文書研究者的選擇權委托給了藤枝先生。可是先生終未能將這些細長的，或是四方的紙片做盡可能的綴合，附以釋文，也未能對文書的歷史背景做出多角度的深入研究。

經藤枝晃先生介紹我認識了劉永增先生。在劉先生留學日本以前我們就有了交往。一九九〇年，偶然地又結識了和劉先生一起來館的陳國燦先生。當時，我就和劉先生、吐魯番研究專家陳先生，以及當天一起來訪的敦煌研究院文獻研究所所長施萍婷先生四人一起，共同商討了美術館藏「吐魯番文書」的研究一事。

當時我就表示，應打破國界將其成果公諸於世，遂將文書的研究全部委托給了二位先生。

我認為，藏於日本的未發表的中國文物，能經中國研究者之手作首次發表是極富意義的。

雖然這件事細小平常，但我希望能藉此加深中日間的文化交流，超越過去那個不幸的時代，在各個方面增進兩國間的友好。

最後，謹以此書獻給美術館的創立者，已故祖父中村準策先生。

財團法人寧樂美術館館長 中村準佐

一九九五年仲秋吉日

（劉永增譯）

前 言

「日本寧楽美術館蔵吐魯番文書」の出版に当たり、陳国燦、劉永增両先生並びに、この研究発表に携わって頂いた諸先生方に、私は心から感謝と敬意を捧げます。

この文書は、財団法人寧楽美術館の設立者中村準策（一八七六年―一九五三年）が一九三九年か四〇年頃に、日本の国内で図らずも入手したものと推測しています。

尤も、寧楽美術館の所蔵品の収集内容の概要は次の通りです。即ち、中国の文物では、古代中国の青銅器に始まり漢代を中心にした古銅印や漢代から唐代に亘る古鏡、又、著名な書家の筆跡を留めた宋代・明代の拓本類等と、同時代の観賞陶磁の一群。更に、朝鮮半島に於ける高麗時代から李朝前期に亘る陶磁器の一群。今一つの群は、日本の茶道に係わる陶磁器類と若干の書画等です。

これらの文物を展示する美術館を日本の古都奈良に建てる（一九四〇年）に際して、設立者が望んだのは、日本美術の源流となる中国や朝鮮の古い美術工芸品を観賞する傍ら、この地を訪れる者に、隣国への理解を深めてもらうことでした。

私が「敦煌」の文字に始めて接したのは、一九五四年で、それは所蔵品の中に敦煌写経二巻が在ったからです。然し、この二巻は藤枝晃先生の「徳化李氏凡将閣珍藏」印などの研究が進むにつれて、後に偽物と判定されました。

一方、藤枝先生の専門分野に基づく所蔵品の調査で「寧楽美術館蔵吐魯番文書」は、数少ない吐魯番文書の中でも貴重な資料であることが、早くから指摘されていました。

従って、私はこの文書の研究者の選択を先生に御依頼しました。然し、この文書の紙片の中で、細長いものや小さな四角に裁断されているものを出来る限り繋ぎ併せて釈文を付け、その背景等を多角的に調査研究する迄には至っていませんでした。

劉永増先生と私は、藤枝先生の紹介で、劉先生が日本に留学される以前から交際がありました。一九九〇年、偶々、劉先生とご一緒に来館された陳国燦先生とお会いすることができました。その時、吐魯番研究の専門家、陳先生を囲んで当日同伴された敦煌研究院文献研究所長施萍婷先生と四名で美術館所蔵の「吐魯番文書」の研究のことが話題になりました。

そこで私は、この文書が研究発表に値するものであるならば、国籍に捕らわれずにその成果を世に出すのが当然であると考へて、全てを両先生に御一任した次第です。

日本に在る未発表の中国の文物が、中国の研究者によって最初に発表されるのは、極めて有意義なことであると、私に想います。

更に私は、このような些細な事からでも、中日間の文化的な交流が深まり、過去の不幸な時代を越えて、全ての面で両国友好の絆が太くなっていく事を希望します。

尚、この書籍が、美術館の設立者である亡祖父中村準策への手向けになれば、この上もなく幸せなことです。

財団法人寧楽美術館館長 中村準佐

一九九五年仲秋吉日

編次

前言.....	中村準佑	(1)
關於寧樂美術館藏吐魯番文書.....	陳國燦	(5)
凡例.....		(24)
圖版・釋文.....		(25)
文書目錄對照表.....		(133)

前言

在「日本寧樂美術館藏吐魯番文書」一書出版之際，我謹向陳國燦、劉永增兩位先生，以及為本書的研究發表給予多方協助的諸位先生致以由衷的感謝和敬意。

據推測，這批文書可能是寧樂美術館的創立者中村準策（一八七六—一九五三年）先生於一九三九年至一九四〇年間偶然收集到的。

下面將寧樂美術館收藏品的內容大致介紹如下：

寧樂美術館收藏的中國文物主要包括中國古代的青銅器，以漢代為主的古銅印，漢至唐的古鏡，記有著名書法家真蹟的宋、明拓本類以及諸多觀賞陶瓷等。除此之外，還有朝鮮半島高麗時代至李朝前期的諸多陶瓷，日本茶道用陶瓷器皿、書畫等。

為了展示這些文物，在日本古都奈良建造了美術館（一九四〇年），其時該館的創立者就希望能通過這些日本美術的源流，即中國、朝鮮的古美術工藝品的展覽介紹，並通過涉訪奈良的人們，加深對鄰國的理解。

我最初接觸到「敦煌」二字是在一九五四年。當時在收藏品中發現有敦煌寫經二卷。可是，隨着藤枝晃先生對「德化李氏凡將閣珍藏」印等研究的進展，這兩件寫經被判定為贗品。

另一方面，藤枝先生在其研究的範圍內，對古文書類收藏品進行了調查，很早就指出，在為數不多的吐

魯番文書中，「日本寧樂美術館藏吐魯番文書」亦屬珍貴的資料。

因此，我將這些文書研究者的選擇權委托給了藤枝先生。可是先生終未能將這些細長的，或是四方的紙片做盡可能的綴合，附以釋文，也未能對文書的歷史背景做出多角度的深入研究。

經藤枝晃先生介紹我認識了劉永增先生。在劉先生留學日本以前我們就有了交往。一九九〇年，偶然地又結識了和劉先生一起來館的陳國燦先生。當時，我就和劉先生、吐魯番研究專家陳先生，以及當天一起來訪的敦煌研究院文獻研究所所長施萍婷先生四人一起，共同商討了美術館藏「吐魯番文書」的研究一事。

當時我就表示，應打破國界將其成果公諸於世，遂將文書的研究全部委托給了二位先生。

我認為，藏於日本的未發表的中國文物，能經中國研究者之手作首次發表是極富意義的。

雖然這件事細小平常，但我希望能藉此加深中日間的文化交流，超越過去那個不幸的時代，在各個方面增進兩國間的友好。

最後，謹以此書獻給美術館的創立者，已故祖父中村準策先生。

財團法人寧樂美術館館長 中村準佐

一九九五年仲秋吉日

(劉永增譯)

前 言

「日本寧楽美術館蔵吐魯番文書」の出版に当たり、陳国燦、劉永增両先生並びに、この研究発表に携わって頂いた諸先生方に、私は心から感謝と敬意を捧げます。

この文書は、財団法人寧楽美術館の設立者中村準策（一八七六年―一九五三年）が一九三九年か四〇年頃に、日本の国内で図らずも入手したものと推測しています。

尤も、寧楽美術館の所蔵品の収集内容の太要は次の通りです。即ち、中国の文物では、古代中国の青銅器に始まり漢代を中心にした古銅印や漢代から唐代に亘る古鏡、又、著名な書家の筆跡を留めた宋代・明代の拓本類等と、同時代の観賞陶磁の一群。更に、朝鮮半島に於ける高麗時代から李朝前期に亘る陶磁器の一群。今一つの群は、日本の茶道に係わる陶磁器類と若干の書画等です。

これらの文物を展示する美術館を日本の古都奈良に建てる（一九四〇年）に際して、設立者が望んだのは、日本美術の源流となる中国や朝鮮の古い美術工芸品を観賞する傍ら、この地を訪れる者に、隣国への理解を深めてもらうことでした。

私が「敦煌」の文字に始めて接したのは、一九五四年で、それは所蔵品の中に敦煌写経二巻が在ったからです。然し、この二巻は藤枝晃先生の「徳化李氏凡将閣珍藏」印などの研究が進むにつれて、後に偽物と判定されました。

一方、藤枝先生の専門分野に基づく所蔵品の調査で「寧楽美術館蔵吐魯番文書」は、数少ない吐魯番文書の中でも貴重な資料であることが、早くから指摘されていました。

従って、私はこの文書の研究者の選択を先生に御依頼しました。然し、この文書の紙片の中で、細長いものや小さな四角に裁断されているものを出来る限り繋ぎ併せて釈文を付け、その背景等を多角的に調査研究する迄には至っていませんでした。

劉永増先生と私は、藤枝先生の紹介で、劉先生が日本に留学される以前から交際がありました。一九九〇年、偶々、劉先生とご一緒に来館された陳国燦先生とお会いすることができました。その時、吐魯番研究の専門家、陳先生を囲んで当日同伴された敦煌研究院文献研究所長施萍婷先生と四名で美術館所蔵の「吐魯番文書」の研究のことが話題になりました。

そこで私は、この文書が研究発表に値するものであるならば、国籍に捕らわれずにその成果を世に出すのが当然であると考へて、全てを両先生に御一任した次第です。

日本に在る未発表の中国の文物が、中国の研究者によって最初に発表されるのは、極めて有意義なことであると、私に想います。

更に私は、このような些細な事からでも、中日間の文化的な交流が深まり、過去の不幸な時代を越えて、全ての面で両国友好の絆が太くなっていく事を希望します。

尚、この書籍が、美術館の設立者である亡祖父中村準策への手向けになれば、この上もなく幸せなことです。

財団法人寧楽美術館館長 中村準佐

一九九五年仲秋吉日

關於寧樂美術館藏吐魯番文書

寧樂美術館是日本著名的古代藝術博物館之一，坐落在古都奈良市的伊水園中。伊水園乃關西名勝之地，爲中村氏家族祖業，山水相依，景色秀麗，是一座幽靜古樸的東方園林。早在中村準策先生的時代，就開始在園中營建寧樂美術館，收藏中國古代的陶瓷、銅器和古代印章。一九四〇年，他又收進一批中國吐魯番出土的唐代文書，給館藏增添了新的內容。

對於這批文書的經歷，學術界一直知道不多。從文書被剪裁的形制看，應屬墓葬中出土的隨葬品，文書內容均爲唐開元二年各地送達蒲昌府的牒、狀、辭、帖，或是蒲昌府自理公務的牒文。由此推測，墓主人有可能原爲蒲昌府的高級官吏，命終於軍府，於是下屬官員根據西州傳統習俗，在人殮時將大批過時的蒲昌府公文案卷製作成隨葬品入葬，其出土地點肯定在吐魯番盆地無疑。至於何時出土？最初由誰收藏？已難予查考了。現在所知，這批開元二年的蒲昌府案卷，今天已分藏於四處。中國遼寧省檔案館收藏的五件唐代檔案，其中有四件是屬於唐開元二年蒲昌府文書，與寧樂文書具有一體性。它是一九三二年羅振玉氏從上海帶到長春奉獻給溥儀的禮物。京都橋本關雪紀念館收藏的三件同類文書，是上海著名的篆刻書畫家錢瘦鐵氏由上海東渡後贈給橋本大師的禮物，想必是錢氏自上海古董商處選購的，其時間在一九二三至一九三五年間。這兩批文書雖然數量少，但均來源於上海。一九七三年，日比野丈夫氏公佈了新獲見的藏於日本某地的同類案卷文書二十一片，想必也是由上海流出。而寧樂館收藏的文書，則是蒲昌府案卷的主體，多達一百五十六

片件，東渡前也長時間藏在上海。這些足以表明，至遲到三十年代，這批唐代案卷已由吐魯番流到了上海。

寧樂館藏的蒲昌府案卷，到一九三五年，已是上海顧鰲家的藏品。顧氏沒有留下文書來歷的記錄，但從第一號文書貼紙和第三五號貼紙上的印章考察，在顧氏入藏前，收藏者已二易其主。在第一號貼紙尾部鈐有「古堇毛志新考藏金石圖書之印」，表明毛志新收藏過。一號貼紙前部又有「程青嵩圖書記」、「程×××」印，在第三五號貼紙尾又有「古歙程氏珍藏」。古歙，即安徽歙縣，表明這位出自歙縣的程青嵩也珍藏過這批文書。毛、程二氏或許是顧氏之前的收藏者。

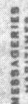
顧鰲字巨六，一八七九年生於四川廣安縣，早年留學日本學法政，回國後任清政府民政部郎中，一九一二年任袁世凱總統府顧問、內政部長。同時又與楊度等人策劃擁袁稱帝運動，時稱為「六君子」。一九一五年袁氏復辟稱帝，任命顧氏為「國民代表會議」常務局局長。袁氏倒臺，顧氏被通緝。一九一八年獲特赦後寓居上海，寄情於古書畫的收藏賞玩，尤鍾情於唐人書寫文字真蹟。唐蒲昌府案卷就是在此後轉到顧氏手中，被視為至寶的。

一九三五年春，法國漢學家伯希和到上海，聞顧氏有此藏，故在「借觀竟月」後寫下了一篇跋文。原文用郵輪信箋二紙，以法文寫成（圖一）。在當時可謂是最權威的學術鑒定了。故而顧氏特請人將其譯成漢文，連同原件一起成了這批文書的附件（圖二）。

一九三六年，在日本名古屋市舉辦「泛太平洋博覽會」，顧巨六氏趁機托人將這批文書送到博覽會求售善價。其時在東京的中國留學者金祖同氏，趕往名古屋參觀，並「以當事者介，得展示一過」，還將文書拍攝了照片。事後金氏根據照片，「稍加分類，離而復合者得數紙」。這些都是金祖同氏回到中國後，一九三九年在《說文月刊》第一卷五、六期合刊上發表《唐開元二年西州屯戍烽燧殘牒跋》一文中透露的，然終未見金氏發表這些文書的內容。在博覽會上，這批文書雖未售出，但引起了日本學人的興趣。一九三七年八月，



Monsieur Kou a eu l'obligeance de me communiquer un
bon de fragments manuscrits sur lesquels comme page de non-
nature à l'époque de ceux qui s'en recueillent surtout à Tchen-toung,
ils appartiennent tous, écrits f.-c., à un même registre, écrit dans
la seule année K'ai-yuen (716). Toutefois ils ne possèdent pas
le Tchen-luong. Ils ont plutôt à divers registres des fragments
d'autres (registres de recrutement, dépenses etc., provenant de la
région de Szechwan. Le général registraire, ou plutôt ses fragments, ont été
recueillis dans la même région. Le registre appartenait aux
archives du 藩 司 P'an-héang-fan, mais d'une entente par le
un 都 司 Tou-tou-fan de Pien-tchong, tout le reste jusqu'à
certains points au 兵 部 Min de P'an-tchéang; je n'ai pas soulevé l'écriteau
remarque ailleurs le mention de ce fan-tou-fan. Bien que la localisation de
Min et Pien-tchéang sous le Tang ait donné lieu de fortes bases à des
opinions contradictoires, j'en ai aucun doute qu'il est dit qu'il n'est compliqué
de l'actuel Fichia (= Pien de Szechwan), et que le vicomte nom de
Pien-tchéang lui est dû même sous les Tang, pour une pleine compréhension de



nous nous le Pao-t'ang des Han, à venir de l'antiquité
 phonétique qu'il y a entre Pao-jan et Pao-t'ang; les exemples
 de ces fautes applications de nous anciens à des circonstances
 substantives nouvellement arrivées sous le P'ang.

Les noms de lieux donnés par les voyageurs, de qui j'ai rapporté ces
distinctions, sont en fon-tou-fo de l'ou-tou-ang, sont rendus
par la phonétique. J'ai écrit le ou-tou-fo (ou-tou-fo) dans une
casse pour plusieurs fois; j'ai l'abbé Pélissier. Les notes, nous
ont été de public géométrique et de parties d'écriture. Comme ces

On trouve aussi une mention
Au Musée de l'opéra
de la - Mary, l'art - de la
de l'Institut de l'éducation.

[illegible]

承顧先生之盛意示余以一種殘牒頗似余曩昔在敦煌
所蒐集之殘篇斷簡手抄本此項殘牒多書開元三年
但決非發見于敦煌也前有人曾數次刊行郡縣志一類之
印刷物(古史記錄之類之多鈔本殘本)出於任魯審地方而此項
殘牒之疑係存同一區域而為其共蓋屬於蒲昌府之官文書
我人以此項殘牒得知有一部督府署其為地之疑係在蒲昌
縣惟倉倉能通行憶及在他處而見因于此部督府之記載至
周于蒲昌為之四里界地計在唐代早已有不同之解說但余認定
即為現在吾昌(吾昌為之東之高昌而為時可稱之蒲昌因
吾昌與蒲昌二字之音相近及由唐某代蒲昌舊名之誤編故唐
代遂作此條謂平昌府之名稱該用于修政區域之劃分者
在唐代誠數見不鮮
此項殘牒可載地方之名稱(無疑乃屬打蒲昌都督府者)
均係郭名性赤亭鎮為我人所熟悉者一即現在之潛亭
其他一類名稱大都為屯戍地及烽燧地其中我人能免
得可謂薩捍烽者余不信在郭名唐書中能免得此
薩捍一名稱余在敦煌撫歸一幅地圖上列由高昌起分
往各路之外往此乃一經西州四達記或即屬於西州圖經者
上有注明之一條如係即薩捍地方之一條路線開元三年
之殘牒載有二世紀年久歷矣之薩捍之記載此外我人
在殘牒中能免得二個左右之郭名稱此項殘牒誠足
為研究唐代吐魯番地方歷史之助也 伯希和於上海

一九三五年四月十四日